A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

石坂洋次郎

日本の文学

58

石坂洋次郎

中央公論社

日本の文学　58

©1964

石坂洋次郎

昭和39年5月6日初版印刷
昭和39年5月15日初版発行

価390円

発行者　宮本信太郎

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷　株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　協和製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)振替東京34

目次

若い人
石中先生行状記 抄
黒いワンピースの娘の巻 459
夫婦貯金の巻 467
干草ぐるまの巻 488
注解 505
解説 山本健吉 512
年譜 526

口絵　「若い人」　生沢朗

挿画　「若い人」　生沢朗

「石中先生行状記」抄　宮田重雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

石坂洋次郎

若い人

一

間崎が勤めている女学校は米国系のキリスト教会で経営している自由博愛主義標榜のミッションスクールであるが、基金が豊かであることと、創設以来の学長であるミス・ケートの磊落な気象とのおかげで、宗教学校にありがちなかたよった冷たい空気もなければ、それが崩れてルーズな下卑た気風に堕することもなく、五百余人の発育ざかりの女生徒たちは、やはりミス・ケートの考案になる簡素な通学服を短く着込んで、芝生と花壇の多い学園の生活をのびのびと楽しんでいるようにみえた。

ミス・ケートは北米モンタナ州の鉱山街ビュートの産、本年五十六歳、長い握柄のついた鼻眼鏡を首につるし、小丘のように盛り上がった胸の上に籠手を組み合せたような腕組みをつくって、始業前、昼休み、放課後の三回、学校の内外を隈なく巡視するほかは、大抵学長室に納まって読書や事務に専念している。毎月曜の第一時限に会堂で全校生徒に修身講話をするのがきまったお役目で、そのほか、月に一ぺんぐらいの割合で各学年に臨時の時間を設けさせ、思索や読書や――規律正しい日常生活の間に蓄積された感想を、美しい流暢な言葉で生徒の胸に伝達する。間崎も一度自分の受け持っている四年B組の臨時授業を参観させてもらったことがあるが、信念の是非は別問題として、話したい内心の要求があって教壇に立つのだから、熱意のこもった立派な修身授業であった。人を威圧する風貌、一抹の暗影もない健康な精神、それらに適度なうるおいを与える深い教養、これがやわらかい感受性をもつ生徒たちをひきつけ、有形無形に学校の気風をつくり上げて行く大きな底力となっていることは、無神論者の間崎といえど日ごろ敬服しているところであった。

ミス・ケートの訓育方針は「少ない規則を確実に守らせる」ということで、すなわち、時間、服装、宗教上の儀式、この三項目については特に厳格な取締りを設けてその徹底を期し、従って生徒も小気味いいほどそれらの訓練を経ていたが、その一方、学校維持費の大半を外国から仰いでいる強みがあるので、監督官庁からときどき指図される訓育施設に関する告達は大抵握りつぶしにして、生徒に自由な空気を呼吸させるように計っていた。

部下の職員に要求するところも、教授法や学級管理法等の形式ばった項目は口にも上せず、徹頭徹尾、生徒を個別に理解せよということに重点をおき、彼女自身、わずかな臨時授業に出席するだけで、全校生徒の顔と名前をくっつけてよく記憶している点では、毎日授業に出る職員の誰もが及ばないほどであった。

間崎はミス・ケートの信念を教育的に正しいものと思った。個性助長とか個別指導とかいう概念は教育界の流行語となっていたが、それをほんとに生かして行くためには百の議論よりも一の信念を必要とする。ミス・ケートにはそれがあった。もちろん、学校は多数を教育する機関である以上、個性尊重の立場に溺れて、生々しい性格の林の中に踏み迷い、全体としての正しい方向を見失うような結果に対しては警戒をしなければならないが、多すぎる生徒と少なすぎる職員との比率は、実際的にはそんな危険があり得ないことを明らかに示していた。

間崎は自分の勤めに喜びを感じた。赴任当初は、年ごろの女生徒に接するのが面はゆくてならなかったが、二年余も経った今日では、自分の知識や感情を適度にパラフレーズして、繊細な感度をもつ少女たちの精神を明るい淡泊な色調に塗り上げていくことに静かな愉悦を感ずるほどのゆとりを持つことができた。

間崎は自分が若い男性であるゆえに無条件に生徒たちから好意を寄せられていることを知っていたが、それを濫用し、それに溺れることさえ慎めば、与えられたハンデキャップは女生徒を指導する上に得がたい天与の一資格であることを純粋に信じていた。素朴的な性の牽引は父と娘の関係においてさえ白極光のように美しい。溺れることとともに、人生をはなやかな曲線で執縛するこの牽引力を反動的に冷却させることをも深く恥じよ。

六月のある金曜日の午後、間崎は、「悪魔の室」と諧謔的に呼ばれている喫煙室にこもって、五年級の作文に朱筆を加えていた。それは天井ばかりがむやみに高い一間半に二間の穴蔵を思わせるような室で、中央に古びた長テーブル、それを囲む四五脚の椅子のほかには花も額もない殺風景な場所だった。

南向きの窓からさしこむ陽はテーブルの面を半分だけ明るく照していた。使用中は、煙草の煙が廊下に流れ出るのを防ぐためにドアの開放を厳禁してあるので、ただでさえ窮屈な室の中は蒸されるような暑さだった。生徒たちは正午から郊外散歩に出かけて留守だった。校舎の中は森閑とひそまって、裏の松林で鳴く油蟬が、濁った余韻のない響きを乾燥した空中にベルトのように吐き出していた。

間崎は、じっとり汗ばんでやけに煙草を吸いながら、一枚一枚、味気なく仕事を片づけていった。同一課題の

未熟な文章を百五十名分も調べ上げなければならないのだから、一般に作文という学科は教師の側にはあまり歓迎されないものになっているが、間崎の経験によると、この学科は、教授者の課題の選び方及び課題解説の成功不成功によってその時々の成績の水準が著しく変動し、よくできた場合には他の学科にみられない溌剌とした面白味を感得することができる。なんというか、みずみずしい感情思索の万華鏡を覗くといったような楽しい満ち足りた気持なのだ。その反対もひどいが——。

間崎は何回目かの苦しい欠伸を洩らして、とうとうペンを捨てた。そして、疲れた涙の目を、たった一輪だけ窓の高さにヒョロ長く伸びた真紅の牡丹に注いで、自分の肉体と精神を漠然と憎悪する感情の中に沈んだ。甲の評点を与えられる文章が今まで読んだ分には一編も出てこない。課題は「雨が降る日の文章」というのだった。ジトジト降りつづく長雨は私たちの魂にカビを生ぜしめる、夏の夕立は心の沐浴だ、朝の雨、夜の雨、子供の目からあふれ出る涙の雨、読んで雨の音を遠くなつかしく耳の底に蘇らせられる文章、雨をインクにして書いた文章……と丁寧にこちらのねらいどころを説明しておいたのに、みんなほんとの雨降りの日を書いてしまった。妹とケンカした子、母に手伝ってお萩をこしらえた子、主婦の友を読んだ子、窓にもたれて讃美歌二百十六番を唄った子——。責はこちらにもあるが、要するに主題を把握する力がなかったのだ。辛抱して五六編も読みつづけていくと、そのどれかに必ずあの「雨が降ります雨が降る、あそびに行きたし傘はなし……」という白秋の童謡が引用されてあるのには苦笑するほかない。五年生じゃないか。

間崎は仕事をきり上げてピアノを弾きに行こうと思ったが、疲れた時のぐずぐずした気持にひきずられて、結局またペンを拾い上げた。今度はたくさんの中からふだんに立派な文章を書く生徒のだけを選んで読むことにした。いつもはこんな仕事のやり方を自分に禁じてあるのだが——。結果は同じことだった。誇張した形容、浮き上がった叙述、こうなると巧詐は拙誠にしかずだ。間崎は最後に、その名前を思い出すとともに棘のようなものを胸に感ずる一人の生徒の文章を読んで、骨が折れるこの仕事をお了いにしようと考えた。五年B組、江波恵子。

「雨が降る日の文章——私にだけ書けそうな気のする文題だ。考えることも読み返すこともいらない。私は黙って私の心にフツフツ浮き上がってくる水泡のようなものを紙の上に書き現わしさえすればいい。私がこんな文章を書く努めざるチャンピオンであることは私の幸か不幸かは誰も知らないし、どうでもいいことだ。

私には父がない。私がこの学校に差出した戸籍謄本に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl

はハツ私生児江波恵子と記してある。家事の徳永先生にいつか『私生児って何ですか』とお尋ねしたら、しばらく考えられて『神様の祝福を受けずにこの世に生まれ出た子供のことです』と大変むずかしい大変簡単なお答えをなされた。徳永先生は私がその祝福に恵まれない身分であることをご存知なかったのかも知れない。もし知っておられたらミス・ケートがなさるように人差指で私の顔のまん中をゆびさして『それは貴方のような方です』と答えられたにちがいない。そうすれば私生児って何のことだか私にもハッキリ納得できたのではないかしら。

キリストには父がない。マリヤは聖霊に感じておはらみになった。けれども私の母は……。母は若い時からたくさんの男のお友達にたよって一家の生計を支えて来た。私の父と呼ばれるはずの人もそのお友達の一人にちがいない。私の生命が、私の父である人が私の母を侮辱することによってこの世に送り出されたものであるとしても、私は神様を父にもつよりは人間の父をもつことを欲する。罪なき者石にてこの女をうて。私ほど母を愛し私ほど母を憎む者はない。母はそのことを知っている。母は今も美しい。けれども年をとって身体も顔も肥って来た。愛か憎しみか、私がもつような生々しい感情の鞭に打たれなければ、母はもうどうして生きていけばいいのかわからないほどに弱くなっている。

『お母様は幸福だったことがあるの』

『わからない、何が幸福で何が不幸なのかお母様には考える力がなくなったの。お母様はお前が傍にいてくれなければこのままぼうとして気違いになるんじゃないかと思うわ。朝から晩まで誰にもわからない歌をうたっているような温順しい気違いにね。……そしたらお前はどうなるだろうね』

お酒を飲んでいた母はすぐに興奮して泣き出した。そして一年に一ぺん遊びにくる外国汽船のキャプテンからもらった古い葡萄酒をもち出して私に飲ませてくれた。私がお酒のうま味をほんとに知ってることを母は気がつかないのだ。

『お母様がそんなになったら——私だってお母様みたいに独立で働いてお母様を大切に養って上げるわ。お母様がお祖父様にそうして上げたように……』

私はその言葉の反応を痛いような気持で母の顔から盗みとろうとした。ああ、だけど、母はほんとに弱りきっている。

『そうねえ、お前はお母様思いだから、私が呆きちがいになってもきっと親切に私の面倒みてくれるだろう。おつくりをすればお前だって十人並の美人だし結構一人で立って行けるよ。女が独立で働くのをかれこれ悪く言うのは世間の奥様たちのひがみだと思うよ。ねえ、だけど

お前は私みたいに肥らないように気をつけたがいい。梯子の上り下りが苦しいし、ちょっとの物事に驚いて胸がドキンドキンするからね。田村さんの奥様は毎朝冷水摩擦と体操をなさるんだとさ』

それが母の答えだった。私はまだまだ夢みる女に過ぎないらしい。それから、母も私もだんまりでお酒を飲んだ。暗い海から吹いてくる潮風が濡れタオルのように顔のほてりを冷やしてくれた。一匹の黄色い蛾が黒いテーブルの面にじっとへばりついていた。母も私も気にかかって、見まいとするほどその不気味な生物に視線をひきつけられた。まだ見ぬ父のことが錐でつかれるように苦しく考えられてならない。

『お母様、女の幸福って男の方からでないといただくことができないものなの。女一人だけの幸福って世の中にはないものなのかしら……？ほんとのことを教えてね』

『お前はときどき恐ろしい大人になるのね。学問したおかげだよ、きっと。お母様にはお前のたずねることがわからないの。世間には私ほど男のお友達をたくさんもった人もないだろうし、また私ほどいつも一人ぼっちの女だった人もないだろうよ。そのくせ何が幸福で何が不幸だかをちっとも知らずに暮してしまった私なの。ずっと昔に、思い出せないの、夢だったかも知れないんだよ、お母様にも幸福らしいものが近づいて来たことがあったんだけど、何だかその背中合せに血を流すような恐ろしいものが隠れていそうな気がして、臆病なお母様は尻込みしてしまったの。後になってからも悔む心なんか起らなかった。ただもうああ恐ろしかった、よかったと思っただけなの。私はきっとそのころから肥り出したに相違ない。

お前の学校の先生がおっしゃるようにもし天国というものがあって、そこで神様が「お前は生きていた時に何をしていた女だ」とたずねられたら「私はたくさんの男のお友達に親切にして上げました。私は誰をも欺きませんでした。一人のために一人をおとし入れるような罪深い行いは致しませんでした。できない約束はどなたにもしたことがございません。私はみな様に公平に親切をつくしました。そうすることが私の生まれつきに協っていたのでございます。だからどなたも私のために争ったり私のために不幸に陥った方はございません」そう言って答えようと思うの。その通りなんだからね。だけどたった一つ神様に叱られるんじゃないかと思うことがあるの。それはね、ときどき一人ぼっちでお室にいるとわけもなしに泣き出してしまうことがあるのよ。なぜ泣くんだか、泣くわけなんか少しもないのに涙がとめどなしにあふれて来て、しまいには声をたてて泣き出さずにいられなくなるの、身体がこんなに慄えてね。どうしようもない。

だけど理由もなしに泣くなんてきっといけないことだと思うわ。ねえ、お前の考えはどう？　なんだかお母様には、お母様が生まれない前にお母様が大人になってから泣かずにいられなくなるような原因がつくられていたような気がするの。そんなことなら誰にもわかりゃしない。ねえ、お母様はいけない女――？』

『知らない。……お母様好きよ』

それが母の姿だった。感覚と理性を白濁した血の流れの中に喪失してしまった原始の女。哀れな母。憎い母。私は女学校の二年生になるまで母に抱かれて寝た。母の温かい手が私のお尻を撫でまわした。母が唇を噛んで泣くのも眠ったふりで知っていた。私の知らない理由で母が泣かなければならないということがどんなに口惜しく悲しかったかを私は今も忘れない。私は母の悲しみの彼方にぼんやり『男』を考えた。今も変らない。けれどもまた母と抱き合っていろいろなお話をするのはこの上ない私たちだけの楽しみでもあった。ある夜の寝物語に、私は母から女の身体の秘密についてきかされた。眠れなかった。涙が出た。けれども翌朝までには私は女に生まれたことに深い意地悪な喜びを感じていた。私はこの喜びを誰にも気どられまいと自分に誓った。私がそうした女であることをハッキリ自覚した時、女に生まれたことの喜びが一層深刻なものになった……。

『お前の指、すっかりもう一人前の女だね。お母様の指環そっくりお前に上げよう。きっとよくうつるよ。……お母様は自分が嫌いじゃない。ないけどお前はお母様とちがっている方がいい。私たちがこんなに仲好しでいられるのも、私たちの気立がひどくちがっているからだと思うの。もしお前がお母様に似てくればお母様はもういらないお母様になるわけだから、お室をきれいに飾って、お化粧もして、静かに死んでいくわ、ヴェロナールのんで。お前止めやしないね。お前の腕の中に抱いて……』

『ええ、止めやしない。そんな日、だけどくるかしら？　来ても来なくても私たち後悔なんかしないと思うけど。……お母様』

『はい』

『好きなの』

『お前お母様の姉さんみたいだね、自分でそんな気がしない？』

『するわ』

うつろに答えた。母は私の指を幾度も唇に当てた。

母にたった一ぺん訪れた幸福――それが私の父だった、なんて考える権利は私にない。そんな理想主義は三文小説のハッピーエンドにしか向かない。世間の物事はその逆をいく。私の暗い生甲斐もそこに見出されるのだ。私は男を知りたい。その男を通して私の父を感じたい。父

の肌を、父の血の匂いを、父の口臭を、父の欲情を――そうすれば私は神の祝福に恵まれない一人の私生児がなぜこの世に生まれ出たかを正しく知ることができるだろう。

母はテーブルにうち伏してうたた寝している。慢性疲労でこのごろは他愛なく眠る。私は窓縁に椅子をよせてひたすらに暗い夜の海を眺めた。海鳴りをきいた。あの音の中に一切の秘密がかくされていそうな気がする。父、現われ出でよ！

結論に来た。気どりやの私は、真理探求に血を流す一使徒としての私を考える。私が処女でなくなる黒い一線がひかれる日は案外近いのかも知れない。私の名はハツ私生児江波恵子！

先生、私のわがままなデッサンです。少しはずかしいんですけど、でも書きたかったものですから」

原稿紙五枚にワクを無視した達筆な走り書きで認めてあった。間崎は烈しい衝動に打たれた。彼は彼だけに示されたかくも生々しい心の記憶を、女はもちろん男の友人からさえ与えられたことがなかった。お下げ髪、水兵服――そのポケットにチョコレートをしのばせた小娘の中にこんな生活があろうとは！　間崎は二度繰り返して読んでから、刺激された感情の方向に彼の「評」を走り書きした。

「私が要求したものは雨が降る日の文章だったのに、貴女は嵐の日を書き上げた。それはすでに書かれてしまったのだ。私は私が教師であるだけの理由で、かくも苦悩に満たされた懺悔を私の生徒に強いる権利があろうとは思わない。いや、これは私の外交辞令だ。ありのままに言うと貴女は豚に真珠を与えたことになろう。私の役目は生徒という概念を指導することにあって個々の魂には関りがない。結局ない。私は白い手の鋳物師だ、型つくりだ、それ以外のものであってはならない。この薄弱な犬儒主義は、私もまた若いという理由でともかくも許容されなければならぬ。でないと私は貴女や彼女や彼女ダッシュの息づまるような心の花園の匂いの中に窒息滅亡を余儀なくせしめられるであろうから。それは私と貴女と、私と彼女との情死を意味する。私たちはミス・ケートの心臓を擁護するためにも当分臆病者の名に甘んじようではないか。私は多くを言いすぎた。『吠ゆる犬は強からず』

以下二三の評を書く。江波恵子は自分を強いと信じている弱い少女だ。彼女の眼はかつて多くの封建婦人が犯されていたつつましやかな色盲症を患っている。それは、微細な陰影をとらえるには敏感だが肝腎の光はことごとく逸してしまう哀れな不具の網膜だ。現実とは自己の対立的存在ではない。自己の積極的意力が時間と空間に働きかけた場合にのみ我々の現実は誕生するものであり、

江波がみたものは遠い昔に死滅した月世界の観念的な現実にすぎぬ。それがいかに美しかろうと、その美は結局博物館に保管さるべきものなのだ。

江波の第二の誤謬は自分の幸不幸をこの冷却した客観世界に依拠せしめていることにある。それは古風な運命論であり、君はその中で自らを瀕死の白鳥にたとえて悲哀の酒に酔い痴れようとしている。与えられる号令は廻れ右！　だ。そして君は一兵卒の四角い素朴な意識をもって君の人生を踏みなおさなければならぬ。妄評多罪」

間崎は一気にその評文を書いてしまった後、寂しい濁った気持にさせられた。人中で調子に乗ってしゃべり過ぎたり、嘘をついたりした時に感ずる渋い舌ざわりな気持。多分彼は評文の中に空疎な美辞麗句を織り込んだものに相違ない。だが、いつの場合でも、そんな風の虚偽は、その時偶然に語られたものではなく、彼の心にそれを醸す不純な滓渣が沈澱している事実を裏書きするものだから、自分の未熟を鞭うつとともにその滓渣を根絶やしする意味で、一度口外した言葉はなるべく引っ込めないことにきめていた。今度も彼は衒気に満ちた彼の即興的な批評を一字も訂正しまいと意固地に決心した。

――間崎は赴任後間もなく江波恵子の名を知った。職員室の話題に上る江波は、ひどいわがまま者で、よく学用品を忘れる、ぜいたくな所持品をもってくる、寄宿生であるにもかかわらず遅刻早引が多い、教師に理屈を言う、そのくせ頭はすばらしくいい、といった風な、教師の側からは最も扱いがたい生徒の一人であった。間崎はそうした噂を聞き、またときどき訓育係の先生に呼び出されてお叱言を食っている、大柄な、美貌の本人を見知ってからも、特別な関心を持つことはなかったが、ふとした機会で江波との間に個人的な交渉が生じて以来、疲れた時、寂しい時、江波の姿が雲のように心をかげらすのに気づいて顔を赤くすることがしばしばあった。恋愛だとは思わない。絵でも文学でも人間でも、頽廃的なものに心を引かれる自分の傾向を間崎は平素から極力警戒していたし、江波に対する関心も、他の生徒にみられない成熟した一つの性格に対する興味にすぎないものだと思っていた。

七月半ばのある日、彼は時間が空いていたので、雑誌をもって裏山へ寝ころびに行った。熊笹の間の小径を通っていつもの丘に上り、一本松の下の窪地に腰を下ろして、まぶしく光る海を眺め下ろしていると、ふと間近で口笛の音が聞えた。ふり向くと彼から三間と離れてない別の窪地に、江波恵子が、両手を頭の下にあてて、あけひろげな形でのびのびと寝ころんでいた。胸に赤い表紙の本をのせ、眼をつぶって口笛を吹いている。間崎は驚くとともに、江波の地面にまかせきったような姿態に反

射的な恥ずかしさを覚えた。彼は近づいて声をかけた。
「どうしたんだ、江波さん」
「とうとうみつかったわ、足音が聞えた時先生かも知れないと思いましたの」
江波は起き上がって彼の顔を見上げ、悪戯を企てた子供のように面白そうに笑った。こうして見るとほんの無邪気な少女の顔でしかない。
「頭が痛いからこの時間だけ先生に休ませていただきましたの」
「君はわがままが通っていいんだね。何の本だ……」
間崎はぶっきら棒に言って江波の傍に腰を下ろした。空も海も青く晴れ渡って誰とでも仲よくできるすがすがしい気持だった。本はフランスの訳詩集だった。
「先生お上がりになる……」
ポケットから銀紙に包んだチョコレートをつかみ出した。
「いろんなものを持ってるんだな。いただこう」
ゆっくり包紙をむいて黒い塊を口に入れた。同じ甘さが二人の舌の上で溶けるのが感じられた。間崎は豊かに肉づいた白い艶のいい横顔をこだわりなくじっと眺め下ろした。チョコレートを含んでポツンとふくれた頬だけ見ていても、眺め飽きない清らかな美しさがあふれ出てくる。江波は、片方の耳に重くかぶさった髪の束を、グイと頭を強く振って払いのけ、それとともに間崎の顔を無邪気に眺め返した。自然な微笑が目の片隅から湧いた。
「君はこうしていると素直ないい人なんだがね。何だってときどきあんな桁はずれなことをやって職員室に呼び出されるんだかなあ」
「私にもわからないんです。温順しい私と悪い心をもった私とが身体の中に別々に住んでいて、私はそのどちらかの奴隷にさせられてしまうんです。温順しい方の私だってほんとの私じゃないような気がするんです。私の顔、ウンと綺麗に見える時と醜い恐ろしい顔に見える時とあるってお友達が言います。どっちの顔も私自分の意志でつくることはできないんですけど。
いつかミス・ケートが倫理のお話の中でお互に食い合う二匹の蛇はしまいにどうなるかってお尋ねになりましたけど、私自分のことを考えると、その不気味な喩え話が思い出されてなりません。人間にすると、それは自分が生きて行くために自分の生命を少しずつ食べて行くっていうことになるんでしょう」
他人のことでもあるように屈託のない顔で語っていたが、やわらかい言葉の底を一筋の黒い糸のようなものがピーンと貫いているのが感ぜられた。間崎は静かに湧き上がる興奮を抑えつけて答えた。
「君の考え方は間違ってないと思う。我々の生命は原始

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl